Latvija
日本ラトビア音楽協会ニュース
第4号
（2006年3月15日発行）

日本ラトビア音楽協会事務局
〒229-0014 神奈川県相模原市若松1-14-10 遠藤税理士事務所内
Tel 042-745-3334 Fax 042-740-4725
E-mail 0424668801@jcom.home.ne.jp

発行代表者 加藤晴生
〒277-0823 千葉県柏市布施新町2-18-9 Fax 04-7132-5423
E-mail katohr@earth.ocn.ne.jp

編集代表者 徳田浩
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田3-31-6-504 柔道新聞編集室
Tel・Fax 03-3203-0363
E-mail htoku@pastel.ocn.ne.jp

第1回指揮者交流プロジェクト

―20度、厳冬のリーガで、松原千振氏が大聖堂少女合唱団に日本の合唱曲指導

全国から参加した先生たちの前で公開練習

国際交流基金の助成を得る

松原千振指揮者（協会常務理事）を派遣してリーガ大聖堂コーラス学校少女合唱団に日本の合唱曲を指導するイベントに、加藤晴生専務理事及び頴原信二郎監事が事務局として随行した。このプロジェクトは国際交流基金の助成を得た。

15日（日） 9時30分成田空港で加藤、頴原合流。松原指揮者は別途の便。子供たちへのおみやげ（コンペイ糖などの砂糖菓子60個）等購入。アイラ・ビルジィーニャ女史（今回の現地パートナー指揮者、ジンタルスの正指揮者）、通訳のカッタイ氏ほかには事前に置時計等用意済み。スカンジナビア航空機に搭乗。12時50分離陸。23時32分コペンハーゲン着。現地時間15日15時32分。（以下現地時間）5時間ほどの待機。20時40分リーガへ出発。22時50分リーガ着。24時頃リーガ市・新市街のホテルへ到着。泊。

16日（月） 14時00分アイラさん、カッタイ先生が打合せのために来宿。①今回の行事内容について。主催はリーガ大聖堂コーラス学校、松原先生の指導する団は『リーガ大聖堂コーラス学校少女合唱団』、サポートはリーガ市役所のエージェンシー「アベ・ソール・コンサートエージェンシー」で、マスタークラスの合唱講習会という形で開催される。講師は、松原さんを中心に発声の先生、声帯のお医者さん（ラトビア大学の教授）、ラトビアにおける音楽家・作曲家の系譜の講演者が参加。松原さんは日本の音楽、合唱曲の特性なのレクチャーも交えての講演となる。②今年11月の日本でのアイラさんの指導する合唱団のことについて話し合う。15分から20分ほどのステージ用に指導する曲目案と楽譜の提供を求めた。③ラトビアの女声合唱曲集の出版について。曲数、ページ割り、判型、コスト。種々のクリアすべき問題多いが、早く実現することで合意。④日本ラトビア音楽協会主催のラトビア訪問旅行の内容について。ラトビア行事を含めた同国をよりよく知る、ということをコンセプトとする。ラトビア側から案が出れば日本の旅行社に組ませてみる。2008年のラトビア音楽祭には日本から合唱団を作って参加したい。15時50分頃終了。16時25分 在ラトビア日本国大使館に田中亨（すすむ）臨時代理大使を訪問。4月の在日本ラトビア共和国大使館開設についての話。11月のアイラさんの日本招聘。ヨーロッパにおけるラトビアの立場、情勢、音楽文化などのレクチャーあり。17時40分辞去。

18時50分 運営委員兼リーガ連絡員のオレグ・オルロフさん来宿。居酒屋リドで食事兼滞在中の打合せ。

17日（火） 14時ごろ松原さんホテル入り。学校訪問準備。15時00分アイラさんの車で松原、加藤、頴原学校入り。60名ほどの団員に紹介され、おみやげを渡す。16時10分から松原さんの日本の歌指導開始。「ほたるこい」「こきりこの歌」「田の草取り歌」「しゃしゃぶ」「アテネチ（イヌイットの歌）」「志都歌」「会津磐梯山」（練習順）。練習終了後、松原、加藤、頴原で大使館へ。

18時30分～田中臨時代理大使の招待夕食会。大使のヨーロッパ文化についての豊富な知識を拝聴。経済関係については加藤さん、音楽文化については松原さんの独壇場で大使も感心。22時30分頃お開き。

18日（水） 9時30分 アイラさんの車で学校へ。10時00分～松原さんにより50人ほどのマスターコースの参加者（ラトビア国内の音楽関係の教師）に日本の歌のレクチャー。11時45分終了。ティーと軽い休憩。13時30分～別の部屋で、生徒の発声指導を見学。16時00分～この日の少女合唱団の練習場アベ・ソル（AVE SOL）へ。アベ・ソルは公共の演奏会場。講習会参加者ともども同合唱団の公開練習見学会。歌のほか、団員によるサキソフォンの演奏などレパートリーのご披露も。18時30分この日の予定終了。

19日（木） 10時00分～アベ・ソルにて日本の歌練習。12時00分～ラトビア国営ラジオ局の松原さんへの取材インタビュー。12時20分～松原さんによる参加者へのレクチャー（合唱団員もともに）。「鯨の子守唄」「うし」等二部合唱が直ちに出来上がる。「うさぎ」「何がある」練習。柴田南雄の「盆踊り」～4つほどのグループに分かれて違う歌を同時に歌う。不思議な歌空間の見事な現出に感心。14時終了。

～この日リーガ市民でもめったに経験しないという大寒波が襲来。リーガ市郊外では、朝は摂氏マイナス30度。昼間でもマイナス23度。30分と外にいられないほど。

14時30分 加藤、頴原、リーガホテルでオレグさんと待ち合わせて翌日以降の打合せ。いったんホテルへ。

18時30分 松原さんも合流してアイラさんの車で一大バイキング・レストランのリド本店へ。カッタイ先生、アイラさんのご招待夕食会。食事のあと地下のバーにて「バルザム」で乾杯。アイラさんの車で帰宿。

20日（金） 9時00分～松原さんアベ・ソルにて合唱団の練習開始。11時00分～アイラさんの合唱団練習。14時00まで。

13時30分 加藤、頴原はオレグさんと待ち合わせてラトビア・インスティチュート（ラトビアを海外に紹介する国の機関）へ。次長（ディレクター補佐）のレイモンド・セリュージス氏と会見。お互いのホームページのリンクを了解。ラトビア紹介の各種資料を受け取る。2月5日の日本ラトビア音楽協会第2回総会などで展示予定。LIのホームページの内容を日本語に訳して日本ラトビア音楽協会のホームページに載せるには別途の契約が必要とのこと。14時50分辞去。オレグさんと別れ、激しい寒さの中再びアベ・ソルへ。

16時30分 ジンタルスのデルカビチャ女史を交えての夕食会へ。デルカビチャ女史、カッタイ先生、アイラさん、アイラさんのお友達のカルンツィエマさん（女性）、松原さん、加藤さん、頴原の7人での会。LAMBETUOKSKAFEJNICAレストラン。カルンツィエマさんはラトビアのオルガン演奏家連盟の会長さん。21時まで。デルカビチャ女史はこの夜健啖で、引退したけれどもジンタルスがあれこれ声をかけてくれて外に出る機会が多いと大変お元気の様子だった。お開き後カッタイ先生がこの大寒波の中、歩いて宿まで送ってくれたが、タクシー、市電などの公共輸送機関が大混乱を起こしており、先生が家に帰り着くのが随分遅くなったとのこと。

10歳～18歳まで約60名のメンバー。すらりと背が高い美女揃いでした

21日（土） 厳寒のため当局のアドバイスによって午前中の練習は中止、夕方の演奏会場も「ラトビア人協会」のGUILDEDホールへと急遽変更となる。16時15分 演奏会。18時20分終演。田中大使「演奏中4回ほど涙が溢れてきて困りました…」。

19時頃から移動して打上げ。団員は厳寒のためか早々に帰宅。カッタイ先生、アイラさん、アギラさん（アベ・ソル責任者）に日本から持参した置時計などの記念品（ネーム入り）を贈呈。お開き後、松原さんと頴原は田中大使の公邸へ。大使と松原さんの話が弾む。25時00分頃辞去。

22日（日） 11時00分 松原さんの見送りの中、加藤、頴原はオレグさんの付き添いでリーガ空港へ。同氏の見送りをうけて13時15分離陸。14時30分コペンハーゲン着。17時57分コペン離陸。約11時間のフライト。23日12時43分成田着。（頴原記）

最終日、ラトビア人協会ホールで成果を披露、ほぼ満席に埋まる

第1回合唱指揮者交流プロジェクトに参加して

松原千振（常務理事）
＝東京混声合唱団常任指揮者＝

ラトヴィアの首都Rigaは連日マイナス20度の寒さだった。時としてこうした厳冬は、北欧に長く滞在した私にはかえって心地良さを覚える。そしてこの気候が招来する文化活動への何らかの影響は、長く私の心にポジティヴなものを与えてきていた。

ラトヴィアに生を受けた音楽家は、ギドン・クレーメル、ミシャ・マイスキ、マリス・ヤンソンス等が現在では著名だが、かつてはワーグナーが滞在し、ブルーノ・ワルターが指揮し、バッハの一番弟子だったヨハン・フリードリッヒ・ミューテルがオルガニストだったこと等を考えると、この国の存在に掛け替えのなさを感じる。

そしてあの大合唱祭。1872年に始まり、5年毎とは言え、合唱活動に関わる者として、あのハーモニー、徹底した選曲と指導者のリーダーシップは、ただごとではなかった。そしてこの町に存在するプロ合唱団の数も尋常ではない。ラトヴィア放送合唱団、ラトヴィア国立合唱団、室内合唱団Ave Sol、オペラ合唱団…。

今回の交流プロジェクトはこうした町にあるカセドラル少女合唱団を主体に行われた。方法もユニークで、これを単なる練習とコンサートに留めるのではなく、「合唱マスタークラス」という設定をして、参加者をラトヴィア全国から集め、日本・ラトヴィアの事に絞らず、集まった音楽教師、合唱指揮者のために技術的なセミナーを設け、文化プログラムでコンサートに趣きを与え、最後にマスタークラスとしての証書を発行している。かなり綿密であり、意義のあるイヴェントとしての試みに独自性があった。

さてリーガ・カデドラル少女合唱団に今回演奏する楽譜を送付したのは確か昨年の10月だった。しばらくして指揮者のアイラ・ビルジィニァから、楽しく練習しているというメールが届き、11月に出会った時は、1月に入った時に再び練習するとのことだった。決して楽な曲ばかりではないと思うのだが、恐らく行届いた指導が行われていたものと想像する。

ラトビア国営放送からインタビューを受ける松原氏

1月17日、プロジェクト初日の練習で、まず、小倉朗「ほたる」を試みた。実に均質な音と自発的な歌い方は、有能な合唱団であることを感じさせる。こうした合唱団の一人一人は、時として集中力を失ったり、余談に熱中したりすることがある。それはそのとおりだったが、何か自らにミスを感じたりすると、愉快とも思える程の修正能力を示すのだった。練習が日々進むと、余裕（含む慣れ）が出てきて、楽しそうに歌う様子が何よりであった。

このマスタークラスで、日本の童唄についてのレクチャーも行った。島国日本の童唄は、その有効性、歴史、調性、地理に特質があり、話しながら、聴きながら、見ながら、そして共に歌いながらのレクチャーは、参加者と合唱団員の積極性が助けとなった。

最終日は終了のコンサートが行われたが、折からの厳寒により3人程が風邪で欠席という止むなきに至った。会場も寒い教会から、ラトヴィア・ソサエティ・ホールに変更された。しかし設定された座席はほぼ一杯となり、田中亨日本大使、Ave Sol指揮者のProfイマンツ・コカーシュ等の臨席を仰ぎ、さらに放送局関係者にも聴いて頂けた。

「こきりこ」（小林秀雄編）は優れた作品であり、ソロが重要な役割を果たす。ソロを務めたLiigaは12歳、ピアノ、サックス、ギター、リコーダーを奏する年少のリーダーだった。そのLiigaが歌詞を間違えたが、その収拾能力には舌を巻いた。この稿には書き切れない。コンサート後、彼女たちはマイナス20度の中を帰宅していった。

秋にアイラ・ビルニージャ女史招聘

指揮者交流プロジェクト第2弾は、秋にジンタルス、大聖堂少女合唱団の正指揮者、アイラ・ビルニージャ女史を招聘します。NHK児童合唱団にラトビアの歌を指導する予定です。詳細はHP及び次号でお知らせします。

一層の文化交流を

在ラトビア日本国大使館
臨時代理大使　田中　亨

パブリクス外相外務省賓客として訪日

2月19日より25日の間、パブリクス・ラトビア外相夫妻は外務省賓客として日本を公式訪問しました。同外相には外務省幹部等計11名が同行しました。同外相は22日麻生外務大臣と会見し意見交換を行い今後一層日本とラトビアとの関係を一層強化することで意見が一致しました。同外相一行にとって日本訪問は初めてでしたが、東京の他、京都、名古屋、沖縄の各地を訪問視察し、日本について一層理解を深め大きな成功を収めました。

在京ラトビア大使館の開設とクラヴィーテイス首相訪日予定

現在、ラトビア外務省は4月前後に在京大使館を開設しようと鋭意準備に取り掛かっており、このため関係者を日本に派遣して開館のための準備を行っています。ラトビアが日本に大使館を開設するのは歴史上初めてのことであり大きな期待が寄せられています。

このため4月中旬前後に、クラヴィーテイス・ラトビア首相一行が訪日し、在京ラトビア大使館開設祝賀記念レセプションを主催する予定です。同訪問にはラトビア側としても大変力を入れており、経済相、運輸相等が同行することが検討されています。またこの他今後経済ミッションが同行する可能性も取りざたされています。いずれにせよ在京大使館が開設されますと今後留学生などの査証取り付けが容易となるほか、両国の音楽分野等の交流が促進されるのみならず経済や観光促進が強化されるようになることが期待されます。

このように2006年の春は日本とラトビアとの関係が一層強化される行事で一杯であることは本当に心から嬉しいことです。

コンサート評

邦人最前線作曲家の作品で構成 皇后美智子妃も臨席

NHK東京児童合唱団
第34回定期演奏会
（1月14日・15日／東京オペラシティコンサートホール）

黒澤幸男
（常務理事・くらしき作陽大学音楽学部教授）

戦後60年を経過したわが国の音楽界において、特に創作の分野で合唱音楽が果たした役割は多大なものがある。

かつて文部省が主宰した芸術祭華やかなりしころは、放送局やレコード会社が競って新しい合唱曲を生み出して来たものだ。特に児童合唱の分野では、一流の作曲家たちが意欲的にこのジャンルの曲の創作に取り組み、日本の作曲界に刺激を与え続けてきた。NHK児童合唱団（通称N児）はこの分野での中心的存在で、彼らが初演した曲の数々は、全国の児童合唱団や女声合唱団のレパートリーとして定着している。

今回の定期演奏会もこの合唱団の創作的な部分での活動を体現したもので、「夢・つくる・未来」と題され、池辺晋一郎、新実徳英、信長貴富という現在の作曲界の最前線で活躍している作家の作品4曲が取り上げられた。

今回演奏されたうちの2曲（信長貴富「ひかりのうたげ」、新実徳英「舞歌Ⅱ」）は、2005年度の委嘱作品で昨年11月に開かれた日本音楽集団の演奏会で歌われたものの再演。ジュニアクラス（小学2年－4年）とユースクラス（中学3年－高校2年）がそれぞれ演奏した。

他の2曲は2006年の委嘱作品で今回が初演。合唱組曲「さようならピッピ」（蓬莱泰三作詞／信長貴富作曲）はシニアクラス（小学5年－中学2年）が演奏。「夜明けのイソップ物語」（村田さち子作詞・台本／池辺晋一郎作曲）は3クラス全員の出演、舞台一杯に溢れんばかりのメンバーが熊谷章の演出で楽しいステージを展開した。

会の後半には皇后美智子妃も臨席されて華を添えられた。

昨年この合唱団の音楽監督に就任した指揮者の栗山文昭氏は、直前に体調を崩し、椅子に腰掛けての指揮であったが、見事に4ステージの長丁場を振り終えた。

ご挨拶

日本ラトビア音楽協会の皆様へ

「ラトビアは音楽の国、歴史に目を向け相互理解を深めつつ、コラボの新しい道を見出す喜びを表します」

ヴィタ　カルンツィエマ
オルガン奏者
ラトビア音楽アカデミー講師
ラトビアオルガニスト協会会長

ラトビアは音楽の国と呼ぶことができましょう。なにしろ13世紀以来、パイプオルガン音楽と声楽が共に親しまれ、一体となって演奏されているのですから。ラトビアの敬虔な宗教心はルーテル教とカソリック教に根ざしていますが、その結果、少数の正教の教会を除くほとんどの教会にパイプオルガンが普及しました。W. アマデウス・モーツァルトはパイプオルガンを“器楽の女王”と評しましたが、バルト海沿岸で最初のキリスト教会が建立されて以降、ラトビアの歴史上大きな存在となっています。オルガン製作が勢いを増したのはロマン主義の隆盛と時を合せており、19世紀から20世紀に変わる頃に伝承による製法は、かつてない高品質を生み出し多数が製造されました。不幸なことに、ソビエト支配のイデオロギーはいかなる信仰とも相容れないために、20世紀後半に造られたオルガンは僅か一つ（！）しかありません。

今や首都リガはパイプオルガン音楽の中心地であり、中でも注目すべきはリガドーム（大司教のおられる大聖堂）にある「ヴァルカー」ブランドの四段の手鍵盤を持つパイプオルガンです（1883〜84年製）。夏期にはそこで一週間に三つの演奏会が開かれることもあります。そのオルガンによって、ラトビアや海外から集まる国際レベルの多くの演奏家が技量を試されます。その歴史的な楽器は、今でも欧州最大級のオルガンであり、豊かな音と音響領域が持つ可能性が、真鉄に吸い寄せられる磁石のように真の音楽家を引き寄せています。このオルガンは、ロマン派オルガン製作の伝統にとって記念碑であり、製作当時そのままの型枠を残しており、すべての補修は19世紀の製作技法を取り入れて慎重に行われています。ラトビア音楽学校の卒業生達は、卒業試験でそのパイプオルガンを演奏できることを最高の栄誉と考えています。若き演奏家達は習熟の技をしっかりと披露せねばならず、ラトビア最高のパイプオルガンでの最終試験を終えた後は、欧州や世界各地でコンクールや祭典に於いて、多くの成功を収め経歴を積み重ねます。

ソビエト連邦崩壊後に演奏可能であったのは、もちろんリガドーム教会だけではありません。リエパヤには四段の手鍵盤オルガンが2台現存し、ヴァルミエラ、セシス、ウガーレ、リガの各教会にはオルガンが製造時のまま保存されています。ウガーレにある1701年製のものは価値ある一つです。ラトビアの誇る手造りの芸術品を残した匠の技の持ち主は次の方々です。H. A. コンティウス、C. ラネウス、T. ティーデマン、K. ヘルマン、K. A. ヘルマン、A. マーチン、E. マーチン、F. ヴァイセンボーン、J. F. シュルツ、F. ラデガスト、G. グルネベルグ、W. ザウアー、E. F. ヴァルカー、G. F. シュタインマイヤ、H. コルベ、M. クレズリンス、J. ジャウギエティス。今、ラトビア人のオルガン奏者の間には、現代の音楽ホールの一つに新しいパイプオルガンを設えて、高価ながらそれに見合う文化の伝統が継承されていくことを望む声があります。

設置が特に望まれるのは、人気の高い三大パイプオルガン音楽祭が開かれるリガドーム音楽祭（夏）、リエパヤ音楽祭（秋）、セシス若手オルガニスト音楽祭の会場であり、バルト諸国の才能と創造性に恵まれた多くの学生が集まる場になっています。現代の学生達が、一見時代遅れに見える私たちの芸術である楽器に対して多大な興味を示していることを知るにつけ、驚くと共にオルガンに携わる私たちにとって報われた気持ちになります。

パイプオルガン演奏が私たちの文化遺産であることを広く認識し、それを発展させるためにラトビアオルガニスト協会がコンサートオルガニスト、教会オルガニスト、オルガン製作者、オルガン賛美者により設立されています。協会は定期的に熟達者の授業、講義、演奏会を開き、楽譜や情報誌「Vox Humana」を出版しています。

パイプオルガンはラトビアの教会で何世紀にも亘り絶えることなく音を響かせてきました。ところが、ラトビア人によるオルガン音楽作曲の歴史は僅か一世紀しかありません。作曲の蓄積は当初は低調でしたが、あの20世紀後半に「楽器の女王」に対し作曲家達は、とても強い興味を抱くようになりました。近年になり、国の独立によって国際協力の弾みが付いてきました。ラトビアの音楽遺産を、世界文化の多様化に関心を持つ人々と分かち合う機会を、できるだけ捉えたいと私たちは努めています。

日本ラトビア音楽協会にご挨拶をさせていただく当たり、歴史に目を向け音楽に対する理解を相互に深めつつ、コラボレーションの新しい道を見出せる喜びを心から表したいと存じます。

（英訳：トムス　オストロフスキー、和訳：中嶋勝彦＝東京稲門グリークラブ）

会員だより

映画「Believe」のこと

菅谷信雄
（マーキュリー物産）

先日の異業種交流会VAVクラブで細川元首相夫人細川佳代子さんと再会した際に、彼女が陣頭指揮して作った映画「Believe」を観るように勧められ、昨夜観てきました。

細川佳代子さんは、知的障害者によるオリンピック、スペシャル・オリンピックスの実行委員長として、昨年日本で初めて長野での開催にこぎ着けた功労者です。

スペシャル・オリンピックスは、身体障害者が参加するパラリンピックと比べ知名度は低く、昨年の長野五輪でもマスコミの報道は微々たるものでした。しかし、細川佳代子さんの政治力もあり、小泉首相が開会式に参加したり、5千人の聖火リレーのイベントをしたりで、日本人にも多少知られてきました。

スペシャル・オリンピックスは、故ケネディ大統領の妹ユニス・シュライバー婦人が1970年に創設しました。シュライバー夫人の姉、つまり故ケネディ大統領の妹は、知的障害者でした。当時知的障害者に対しては、米国内でも偏見が多く、社会的参加は困難な状況でした。シュライバー婦人は知的障害者の社会参加により自信を持たせることと、社会的偏見を取り除くことを目的に知的障害者によるオリンピック、スペシャル・オリンピックスを創設しました。細川佳代子さんも、知的障害者の社会参加促進と自立のために日本でのスペシャル・オリンピックス実現に奔走しました。

しかし、その一方で知的障害者から多くの贈り物や愛を頂いたそうです。彼等は実に純粋、純真で、人を騙すことを知らない。そういう人間としての魂の尊厳、人としての大事なものを知的障害者と頻繁に接することで学んだそうです。

さて、現在上映中の「Believe」は、昨年2月長野で開催されたスペシャル・オリンピックスを題材に、知的障害者達が報道取材陣として参加しました。当初、知的障害者にできるかどうか不安があったそうです。始めの頃は一番重要な機材カメラのレンズ部分を手で触り、指紋や汚れが目立っていました。しかし、その後、カメラが最重要機材だと理解すると、普通の人以上にカメラを大事に扱い、最後は指紋1つつかない状態になっていたそうです。

取材に関しても、最初はNGの連発でしたが、だんだん知的障害者による知的障害者の為の、知的障害者の取材・報道ができるようになり、一般健常者では撮影できないような感動シーンも数多く撮影できるようになりました。

そんな知的障害者参加型の映画「Believe」を現在澁谷シアターイメージフォーラムで1月中旬から1ヶ月のロードショーで上映中です。しかし、昨夜の入りはがらがら、これでは途中で上映が打ち切られる可能性があります。皆さんも是非一度違った世界を覗きにいきませんか。そして、これを機会に知的障害者の方達を応援しませんか。映画を観ること自体が、知的障害者の応援、支援となります。映画館の場所は、渋谷駅から青山通り沿いに徒歩5分、スターバックスの手間を右折すると直ぐのところにあります。

協会ロゴ決まる

当協会のロゴが決まりました。数名の方に試作していただき、最終的に理事・運営委員の投票で里見鞠子氏の図案に決定しました。

第2回総会・懇親会に54名出席

2月5日　霞ヶ関ビル・東海大校友会館

冒頭、熊谷前会長の冥福祈り黙祷

新年を迎え、日本ラトビア音楽協会の新年初理事会と第2回目の総会、懇親会が2月5日（日）霞ヶ関ビル33階の東海大学校友会館「富士の間」で開かれた。

総会には昨年来活発になった諸事業を反映して54名の方々が出席され、第2年度に向けて打ち出されている協会の活動内容にそれぞれ協力し、盛り上げるという決議がなされた。

また懇親会も前回同様ピアノ演奏、独唱などのパフォーマンスで、音楽協会にふさわしい豊かで和やかな雰囲気に終始した。

藤井威新会長

岡村喬生副会長

新年初理事会報告

総会開催に向けて、11時30分から理事会が開かれ、藤井副会長以下役員11名（全15名）、新任理事候補者1名、オブザーバー5名計17名の出席で総会に提出する議案が審議された。

会は運営委員の関口教和さんを司会兼議長役に選任し開会。まず、会員の状況について遠藤常務理事が、現在個人会員122名、団体会員7名、ラトビア国内会員4名の登録、ここのところで新規会員が28名増加し、少しずつ増えていると報告した。

次に加藤専務理事が、役員人事案として熊谷直博会長の急逝により副会長の藤井威さんを会長にという提案の他、新任理事、顧問、運営委員候補者が紹介し、これを承認。

続いて本会規約の一部改正（第11条④項追加）の提案（遠藤）、これまでの事業報告と今後の活動計画の提案（加藤）、平成17年度の会計報告・18年度の予算案（遠藤）が審議され、質疑の後いずれも了承された。

オブザーバーは、関口運営委員のほか北海道東川町の松岡市郎町長、北海道ラトビア交流協会の西原義弘会長、門司在住の山本徳行スウェーデン名誉領事、ジャネッタ・スードニェツェ〜パレックス銀行東京事務所長であった。

総会報告

新会長に藤井威さんを承認

引き続き平成18年度総会を会員54名の出席を得て開催。会場にはリーガのラトビア・インスティチュートからいただいたラトビアを紹介するカラーポスター10枚余りが張り出されて、雰囲気を盛り上げる。

冒頭、熊谷直博前会長のご冥福を祈って全員で1分間の黙祷を捧げた。

関口教和会員の司会。開会のあいさつに岡村喬生副会長が立ち、「輸入牛肉についての日米の考え方の違いはなにか。食べられればいいではないかというアメリカに対して、世界でも優れた食文化を持つ日本ゆえに神経質になっているということが米によく理解されていないことが原因の一つである。ひいては日本文化がいかに海外で知られていないかということであり、そこに私たち日本ラトビア音楽協会の活動が必要かつ重要である一つの理由があるのです。ラトビアの文化を知り、日本の文化を知ってもらうという互恵の精神が大切です」と話し、会員の金岡隆さんを議長に選出して以下の議事に入った。

第1号議案　平成18年度役員の選任（加藤晴生専務理事）
第2号議案　規約の改正（遠藤守正常務理事）
第3号議案　平成17年度事業報告（加藤）
第4号議案　会計報告（遠藤）監査報告　顕原信二郎監事
第5号議案　平成18年度事業計画（加藤）
第6号議案　平成18年度収支予算（遠藤）

第1号議案では、新会長に元スウェーデン・ラトビア大使の藤井威氏、新任理事に三井物産株式会社顧問の永田宏氏、新任顧問に慶應義塾大学ワグネル・ソサイエティ男声合唱団三田会会長の下田博郎氏、新運営委員に中澤亨（東京、横浜稲門グリークラブ）、松本数馬（三井住友VISAカード）、菊池勇介（東京六大学、東西四大学合唱連盟）の3氏が推薦された。

第2号議案では規約第11条の中に「④副会長及び専務理事は、会長とともに当協会を代表する権限を有する」という項目を加え、運営上の便宜を図るというもの。近年預金通帳の銀行側の管理が厳しく、協会の実務に支障をきたすことがあることから提案された。

第3号議案は以下の通り。

熊谷前会長の冥福祈る

全ての案件を満場一致で可決

1．国際交流基金の助成を受け、「第1回子供のための指揮者交換交流プロジェクト」を具体化し、松原千振常任理事がリーガ大聖堂合唱学校少女合唱団に日本の歌を指導した（2006年1月）。

2．第1回講演会として、岡村喬生副会長が「ヒゲタマのダメモト精神」という演題で講演した（9月2日・日本プレスセンタービル）。

3．協会ホームページ開設した（2006年1月）

4．第2回理事会を開催（9月）。ホームページの具体化、指揮者交流プロジェクト、広報紙「Latvija」の補完として「ミニ情報」を発行（第5号までで終了。代替として12月に「ミニ通信」を発行）、会員の増強、ラトビア大使館開設動向などについての報告などを審議・報告された。

さらに当協会のNPO法人登録申請手続きの実行を承認（本件は現在申請未済）され、当協会のロゴを理事による過日の通信投票により決定した（制作者は里見鞠子氏）。

5．運営委員会は2005年2月6日より本日までに14回開催、上記4項のほか、名簿の発行、楽譜の出版などについても討議、検討した。

6．大鵬薬品工業株式会社殿が今年から当協会の広報紙「Latvija」に協賛広告掲載を了承された。

7．後援事業は5件あったが、早大グリークラブのラトビア・リトアニア演奏旅行では当協会から加藤専務理事がアドバイザーとして参加し、ラトビア共和国文化大臣デマコワ氏ほか音楽界の関係者を表敬して今後の交流について話し合った。

以上の報告があり、特に質疑なし。

第4号議案、17年度会計報告として「収支計算書」「貸借対照表」「財産目録」の説明。金岡議長から収入の部の雑収入が不自然に大きいがという質問があり、これは会合の会費収入などを組み込んだためのもので今後は項目を考えるという説明があった。

第5号議案の新年度以降の事業計画は以下の通り

1．ラトビア大使館開設に伴う歓迎レセプションを開催する（4月〜6月）。

2．「第2回子供のための指揮者交流プロジェクト」実施する（11月）。

3．会員による講演会を年3回程度に増やす。

4．ラトビア音楽の集い（仮称）を開催する。

5．会員数の増強と資金ソースの多様化を図る。

6．ラトビア女声合唱曲集を出版する。

7．ラトビア訪問（2007年〜2008年を目処として）

8．ラトビア人演奏家の招聘。

9．その他

以上について特に質疑なし。

第6号議案、本年度の予算について年間収入予算を280万円程度、支出予算は若干押さえ気味ではあるが、200万円余りとしてスタートしたいと説明。

以上について特に質疑なし。

これによって議案説明が終わり総合質疑ののち、第1号議案から第6号議案までが満場の拍手によって一括承認された。

ここで藤井新会長があいさつに立ち、「熊谷前会長の急逝には驚きました。その後任として責任の重大さを感じております。特に今年は4月に在日本ラトビア大使館が開設されるということがあり大事な年であります。その後押しをしていくわけですが、民間のラトビア友好団体としては当協会と、本日もご出席の北海道東川町のラトビア交流協会の2団体しかないわけです。文化交流を進めていくうえでも大切な会ですので、今後とも皆様のご支援をよろしくお願いしたい」と就任の弁を述べた。

続いて新しく理事に選任された永田宏氏が「今朝のNHKの放送で、日本の指揮者がカンボジアの子供たちに日本の歌の合唱を教えるという番組を見ました。カンボジアでは長い間国によって歌うことが禁じられてきており、それをほぐすためにともに歌うという内容です。大変立派なことだと思います。私はビジネスの方が得意なわけですが、そちらの方のノウハウで尽力できればと思います」とあいさつした。

また、本年1月の第1回指揮者交換プロジェクトの派遣指揮者、松原千振常務理事が報告（別掲）を行い、最後に加藤専務理事の閉会の辞で終了となった。

懇親会

ボニージャックス西脇氏がご自身の作品などソロで披露

懇親会は田摩勇運営委員の司会で進行。出版文化国際交流会専務理事の石川晴彦氏が「昨年はリトアニアのビリニュスで日本の文化を紹介するブックフェアを開き、大変な関心を持ってもらった。今年からはこのフェアにラトビア、エストニアも参加して、バルト3国の人々に日本の出版文化を通じて日本への理解と興味を持ってもらえることとなっており、音楽を通じて交流するこの協会と歩を同じくしていければと思っている」とあいさつして乾杯の音頭をとり開宴。

しばらく歓談をはさみ、パレックス銀行東京事務所長ジャネット・スードニェツェさんから「お招きいただき感謝します。これからもパレックス銀行をよろしく」と日本語でのあいさつ。次に藤井会長から紹介されて、以前からラトビアと親交のある北海道東川町から出席された松岡市郎町長と東川ラトビア交流協会会長の西原義弘さんが登壇。町長からは「東川町は写真の町、国際写真フェスティバル開催、写真甲子園の町として全国的に有名です。そしてラトビアとの交流では15年経ちました。今回東京都の写真美術館で6月に『写真の町東川賞海外作家コレクション展』を開きます。その中にラトビアの作家も入っています」とあいさつがあり、西原会長からは「東川町ラトビア協会で手がけている出版物などいろいろの事業を紹介する資料を一式用意していたのですが、昨夜千歳の方が猛吹雪で残念ながら資料が届きません。後日皆様にDMいたします。これまで東川には作家のヤーニスさん、以前の文化大臣で有名なピアニストでもあった『100万本のバラ』を作曲したパウルスさんも訪れています。またラトビアの日本語学校のブリギッタ校長先生、卒業生のオレグ・オルロフさんなどとも親交があります。リトアニアの大使、前エストニア大使とも交流があります。これからもいろいろな文化発信をするつもりですのでよろしくお願いします」と東川ラトビア交流協会の紹介があった。

続いて日本写真協会の大平氏が「東川町の立派な活動に敬意を表しています。6月の写真展を成功させたいと思っています」とあいさつ、さらに同協会の平木氏が「私も3〜4年前にバルト3国から写真の賞を選びたいということでリーガに2週間ほど滞在してバルト3国を回ったことがあります。非常に素晴らしい文化をもち続けている国だと痛感しています。皆様にも写真でのラトビアを鑑賞していただければとも思っています」とのスピーチした。

しばし歓談と交流の輪が各所で広がって宴もたけなわ、司会からケイコ・マクナマラさん（会員・ジャズボーカリスト）の紹介があり、ラトビアでは誰でも知っている「風よ吹け」を歌う。「この歌はラトビア人の心の歌です」という藤井会長の前説を受けてケイコさんが登場し、ラトビア語で見事に歌い上げた。

次に金沢在住の小松原るなさん（会員・カンツォーネ歌手）がステージに上がる。るなさんはロシアの曲を、歌うだけではなく詩の朗読を織り交ぜるという形で印象的な演奏をした。

そして最後に西脇久夫さん（理事・ボニージャックス）が登場、1967年にラトビアを初めて訪れたときの思い出話とともに『モスクワ郊外の夕べ』を歌う。1番をロシア語で若干の遠慮勝ちの歌唱（まあ日本での演奏ということでご寛恕あれ）、細やかで優しい大人の歌を披露。伴奏は早川佳美さん。西脇さんはまた会場のアンコールに応えて自作の曲『あなたの笑顔』という曲も披露した。

和やかな懇親会は2時間に及び、福島県芸術文化団体連合会の板垣忠直氏の『一本締め』で中締め、それぞれが次回再会を祈念し合ってお開きとなった。

実りある懇親会。下は左からジャネット・スードニェツェ、ケイコ・マクナマラ、加藤晴生、竹村洋美の各氏。円内は西脇氏

【出席者】◇印理事会出者

石井　洋一	石川　晴彦
石川　弥貴	石川　了
板垣　忠直	市川　直樹
頴原信二郎◇	遠藤　守正◇
大平　恩	岡村　喬生◇
小川　翠	岡安　弘二
岡安　陽子	小山田安宏
加藤　晴生◇	加藤　民子
金井万里子	金岡　隆
神郡　克彦	ケイコ・マクナマラ
小林　信一	小松原るな
斎藤　哲◇	坂田　知子
清水　光子	
ジャネッタ・スードニェツェ◇	
杉浦　保友◇	鈴木　秀洋
関口　教和◇	滝澤　文一
竹村　洋美	田摩　勇
徳田　浩◇	中嶋　勝彦
長澤　護◇	永田　宏◇
奈良原秀三	西原　義弘◇
西脇　久夫◇	羽場
平木　収	藤井　威◇
藤井　明子	堀内　啓吉
松岡　市郎◇	松原　千振◇
八木　昌子	山本　徳行◇
早大グリー6名	

ラトビア ショート ニュース（2月）

オレグ・オルロフ
（ラトビア在住会員・運営委員）

1．リガでマツイケイコ日本ジャズピアニストのコンサートが行われる

2月28日、リガ・コングレスホールで行われる「Hansabanka Jazz Spring」コンサートシリーズにはSmooth Jazzの優秀で、才能ある日本のピアニスト・作曲家マツイケイコさんがステージに上がる。コンサートでは最新作アルバム「Walls Of Akendora」の作品を中心に旧作も演奏する。2年前、マツイさんがリガで行ったコンサートは大成功だった。

コンサートにはマツイさんの夫であるマツイ・カズさんも参加する。カズさんは日本の伝統的な楽器、尺八を吹くことで有名。ハリウッド映画の音楽録音にも度々参加している。

2．3月に第11回バルト国際バレーフェスティバル開催

3月16日〜22日の間、リガ、クルストピルス、ヴァルミエラ、プレイリ、ダウガウピルス、イエルガワで第11回バルト国際バレーフェスティバルが行われる。今回のフェスティバルのモットーは「クラシックからアバンギャルドまで」。フェスティバルには多くの国から、クラシックと現代的なダンスの芸術家が訪れる。このフェスティバルでは、アメリカ、オランダ、スペイン、日本、クロアチア、ロシア、リトアニア、エストニアとラトビアなどのパフォーマンスを楽しめる。

フェスティバルの開会式はリガ鉄道駅で3月17日に行われる。

ガラコンサートは3月19日ラトビア国立オペラで行われる。コンサートには、一番輝いているアメリカ、日本、スペイン、オランダ、イスラエルとラトビアのオペラスターが舞台に登場する。

3．トリノオリンピックで銅メダル獲得

トリノで開催された冬季オリンピックで2月12日、マールティニュシュ・ルベニス選手が、独立以来初のメダルを獲得した。ルベニス選手はルージュが強く、ラトビア人は彼がオリンピックで初のメダルを取るかもしれないと心の中で期待していた。実際にメダルを獲得したことは凄い。ラトビアが1991年に再び独立して以来の初メダルである。頑張ってくれてありがとう！

他にバイアスロンの選手、スキーの選手、ボブスレーの選手も良い成果を残した。

残念ながらアイスホッケーチームの成績はあまり良くなかった。もう少し良いプレイを皆が期待していた。5月にリガで行われる国際選手権までに良い準備ができるといい。

4．2008年のユーロ導入は遅れる恐れ

ラトビアは2004年5月にEUに加盟し、2008年からユーロを導入する予定だったが、専門家によると、ラトビアのインフレ率はユーロを導入できるレベルを超えているので、ユーロ圏に加盟する時期は延期される可能性が高い。2005年にユーロ導入できるインフレ率の水準（他のEU加盟国のインフレ率の影響により毎年若干変わる）は2.5%であったが、ラトビアのインフレ率は6.7%に達した。しかし、今年のインフレ率は下がるそうだ。隣国のエストニアも2007年に予定したユーロ導入は遅れる恐れがある。ラトビアと同じように決められた水準よりインフレ率のレベルが高い。

（2006年2月26日記）

写真の町で知られる ラトビア交流の先輩・北海道東川町

6月に東京で『海外作家コレクション展』開催

2月5日の総会に、はるばる北海道東川町から、同町ラトビア交流ボランティアの会西原義弘会長の他、松岡市郎同町町長、同町特別対策室市川直樹室長、大平恩、平木収両日本写真協会理事の5名が参加されて親しく懇談されました。

東川町はラトビア交流でも我々の先輩ですが、写真の町としてあまりにも有名です。当日も案内がありましたが、今年東川町が東京で開催する『海外作家コレクション展』を紹介します。7700人の小さな町から発信されるとても大きな情報です。会員の皆様もぜひご覧ください。

「うまい空気」「おいしい水」「健康な土」を誇る東川町にも、フラッとお出かけになりませんか。旭川空港から車で7分、札幌からはJRと車で2時間です。地元で獲れた食品の田舎料理でもてなしてくださるはずです。とりわけ100パーセント東川町のおいしい水で育ったお米「ほしのゆめ」は格別の美味です。

東川町の地道なラトビア交流を8面に紹介しました。当協会と一層連帯を深めたいものです。（徳）

東川賞海外作家コレクション展

1．開催趣旨

北海道の屋根大雪山を仰ぐ東川町は、1985年（S60）6月1日全国で初めて『写真の町』を宣言し、国際写真賞「東川賞」を制定して国内外の優れた写真制作とその作家を顕彰し、同年より現在に至る過去21年間に渡って、毎年夏に国際写真フェスティバル「東川町フォトフェスタ」を開催してきました。東川賞は、海外作家賞、国内作家賞、新人作家賞、特別賞の4つの部門から成り、東川賞審査会により選出され、受賞者はフォトフェスタに招聘のうえ会期内に受賞式を行い、東川町文化ギャラリーで受賞作品展を開催して参りました。また各受賞者には受賞の記念として、任意で作品を東川町民に寄贈していただき、それらは町の誇り、町民の文化的な財産として永久保存されております。

すでに21回と回を重ねてまいりました東川賞コレクションは、内外の第一級の写真家ならびに先駆的にその才を認められた新人写真家たちの

傑作、秀作の宝庫と言っても過言ではありません。なかでも海外作家賞の受賞者諸氏によって東川町にもたらされた作品は、本邦では町外未公開の作品を多く含み、極めて貴重なコレクションと自負しております。

今期は、写真の町を宣言してちょうど20周年、さらには東川町開拓110周年の節目を迎えることから、これを契機として、これまでの意義と歴史を1人でも多くの方々にご理解いただくとともに、写真文化の更なる発展を願いながら、2006年度の東京写真月間と連携して、東京都写真美術館において東川賞海外作家賞受賞作品コレクションの一部を公開する運びとなりました。

写真の町東川賞海外作家コレクション展の盛会を期すため、趣旨をご理解いただき、関係各位のご支援ご協力を心よりお願い申し上げます。

北海道〈写真の町〉東川町
町長　松岡市郎

2．開催期間
2006年6月1日(木)～18日(日)
※月曜日休館
10：00～18：00
（木・金は20：00まで）

3．開催場所
東京都写真美術館三階展示室
〒153-0062　東京都目黒区三田一丁目13番3号
恵比寿ガーデンプレイス内
電話　03 (3280) 0099
FAX　03 (3280) 0033

4．展覧内容
【第1部】海外作家賞受賞作品に見る現代写真　約150点
Part1.『写真で眺める』
Part2.『人間凝視』
Part3.『人間社会の呼吸』
Part4.『幻想と意識』
【第2部】東川の生い立ち　約30点
－ぼくの日記帳は、カメラだった－
戦前から半世紀以上に亘って東川町を撮り続けた偉大な町民アマチュア写真家・飛騨野数右衛門（日本・2001年第17回東川賞特別賞）の東川アルバム展

当協会創立総会での出会いから生まれた ケイコ・マクナマラ福島コンサート

「白夜の国から愛を込めて」

板垣忠直
（会員・福島県芸術文化団体連合会副会長）

日本ラトビア音楽協会・スウェーデン大使館などの後援を頂いて、「白夜の国から愛を込めて＝スウェーデンジャズの女王 ケイコ・マクナマラ&アンリー・ロビン　デュオコンサート」と題する演奏会を、去る2月22日福島県文化センター小ホールで開催いたしました。

主催とスタッフは、昨年2月5日日本ラトビア音楽協会設立総会のおり、ケイコさんとの繋がりができた私とスコラカントルム福島と梁川交響吹奏楽団の有志で組織したKeiko & Friends. Fukushiumaで、音楽を通した国際交流の一つとして計画しました。開催前から地方紙で大きく報道され話題になっておりましたが、当日は地元の福島を始め、山形市　仙台市　郡山市　伊達市などから300人程のファンが集まり、福島市としては珍しいジャズのコンサートは、素敵な雰囲気に包まれた暖かい演奏会に終始しました。

プログラムは2部の構成。1部はケイコさんの弾き語りで、百万本のバラの原曲「マーラがくれた人生」などを、信じられない程の卓越したピアノの技巧と暖かいヴォーカルで聴衆を魅了し、2部はケイコ・アイリーンのデュオで、2人の見事なコンビネーションで、ケイコさんのオリジナル曲「平成」や「鐘木」などの難曲を事も無げに演奏し、聴衆に感動を与えてくれました。

ケイコさんは、翌々日の24日には、猪苗代湖の南に位置する辺地に新設された、小中一貫教育のモデル校、「湖南小中学校」にオリジナルソング「美しき湖南讃歌」を贈り、その様子はNHKをはじめローカルテレビ各局で放映されました。

◇

ケイコさんは東京都出身。有名なピアニスト・安川加寿子さんの姪という音楽家系の育ちです。スウェーデンは夫の母国で、国王から「北極星勲章」を受けておられます。私がケイコさんと出会ったのは昨年2月に開かれた「日本ラトビア音楽協会」設立総会会場でした。スウェーデンと海をはさんだ隣国ラトビアでも演奏・教育活動に力を入れているケイコさんと、ラトビアの音楽に強い関心を持つ私と意気投合し、ケイコさんの多忙なスケジュールを縫って、こんコンサートを実現していただきました。

湖南小中学校では、「私の歌を通じて子供たちに世界とのつながりを感じてもらえて本当に嬉しい」と話しておられましたし、斎藤義益同校校長は「素晴らしい歌です。子どもたちだけではなく、地域全体で歌ってもらうつもり」と話しておられました。

◇　◇　◇

「いろいろな人たちとの出会い、尊敬・愛・交流が私の活動の支えです」

ケイコ・マクナマラさんは、スウェーデンに拠点を置き、演奏、福祉活動に取り組み、多くのチャリーティーコンサートを重ねておられますが、「ラトビア子どもを支援する会」会長としても活躍されています。今年、サントリー小ホールで演奏会を開いた時、2月19日付け世界日報に紹介記事が掲載されました。その一部を紹介します。（文責・編集室）。

「91年にラトビアに行った時には、（ソ連から）独立して間もない時でしたが、西洋音楽を教えてほしいとせがむ子供たちの明るい顔が忘れられません。とても親日的で、子供たちに西洋音楽や日本のカルチャーを教え、『KEIKO賞』を設けて、援助した子供たちがそれぞれ成長し、活躍している姿を見続けています」。

ラトビアは元来地政学的に東西の分岐点で要塞の地だったが、小国の常で苦難の歴史を刻んできた。1940年にソ連に併合されたが、独立後は営々と経済発展に努め、一昨年EU（欧州連合）の一員となった。一方、ロシア系少数民族もいる。EUの拡大で今、周辺情勢は猫の目のように変化し、ラトビアは再び、東西の“十字路”の様相を帯び始めている。そのラトビアで、ケイコさんは“Spring Jazz”“Japan Day”などを企画し活動を続けている。日本での年間10回程度のコンサート以外は、10カ月以上海外での活動。今年はインドネシアにも足を伸ばし、自作「インドネシアの子どもの祈り」などを演奏して音楽に親しむ喜びを伝える。

「昨年、愛・地球博のスウェーデンディに、EXPOホールでコンサートを行い、来日されたヴィクトリア皇太子さまから“これからもスウェーデンの文化のために頑張ってほしい”と声を掛けられました。いろいろな人たちとの出会い、尊敬と愛と交流が、私の活動の支えになっています」。

わたしとラトビア

カッタイさんとの出会い

宮尾益治
（会員・元新潟放送・早大グリークラブOB会）

私がラトビアの首都、リガを訪れたのは1970年のことでした。当時から、私の住んでいる新潟市は日本海を挟んだシベリア各地との交流が盛んで、各都市との貿易や姉妹都市交流も活発でした。その年の7月にモスクワで貿易見本市、レニングラード（当時）で国際姉妹都市会議があり、これらやシベリア各都市の取材のために訪ソしました。その途中、たまたまあいたスケジュールを利用して、取材の休暇のつもりで2泊3日の予定でリガを訪れたのでした。

訪れた初夏のリガは新緑が美しく、それまで滞在していたモスクワの無骨な高層建築を見慣れた私には、しっとりとして落ち着きを感じさせる町でした。宿泊したホテルのある旧市街は中世そのもの町並みが続き、北ヨーロッパの古都という雰囲気でした。リガ大聖堂で世界最古というパイプオルガンの演奏を聴いたり、海岸に近い野外劇場で行われていた市民音楽祭なども見学しました。

滞在中のある日、ホテル近くの公園で、現地の中年の男性に突然「日本の方ですか」と日本語で話しかけられました。カッタイさんという人で、戦前にハルピンに住んでいて日本語を学んだこと、今は地元大学の東洋語学部で仕事をしていることなどを流暢な日本語で話してくれました。当時リガを訪れる日本人はあまりいないということでしたが、温厚で親しみやすい彼とは1時間ほど話をし、写真を撮って別れました。その後、リガで会ったカッタイさんのことは、頭のどこかに残ったまま長い年月が経過しました。

カッタイさんに届けた写真（1970年大聖堂前の筆者）

カッタイ氏

今から6年前、私の所属していた早大グリークラブのOB会機関紙の「稲グリ新聞」に、OB会員がリガで演奏会を行った記事が掲載されていました。記事の中で、コンサート開催に尽力し、通訳としてメンバーの世話をしたカッタイさんのことが写真入で載っていました。30年前に私がリガで出会ったあのカッタイさんでした。「稲グリ新聞」で彼の近況を知り、その偶然さに驚きました。

2003年7月にグリークラブ同期の加藤晴生君（現専務理事）がラトビアを訪問しカッタイさんに会う予定があることを知った私は、昔撮った写真を探し出しカッタイさんに届けてくれるよう依頼しました。彼はラトビアでカッタイさんに写真を手渡してくれ、その後カッタイさんから雄渾な日本文字の手紙と家族の写真が私に届きました。私と彼とが出会ったのはオペラハウス前の公園だったそうです。80歳台で壮健で、今もラトビア・日本協会会長として両国の親善に尽力されているとのこと。30数年前のわずかな出会いが今に繋がる不思議な因縁に感じ入っています。

新刊紹介

『日露オーラルヒストリー』
「‘日本=ラトビア橋’に立つ肖像 中国生まれのラトビア人と異色外交官」

常務理事　斎藤　哲
（日本経済新聞社社友・前ロシア東欧記者会会長）

米重文樹東大名誉教授らと証言集「日露オーラルヒストリー」を出版した。日ロ関係を裏で支えた人たちの話を聞いて文書化し詳しい註をつけた。表紙に中国東北部（旧満州）からラトビアに到る地図を掲げ、その上に収録した5人の顔写真を並べようとしたが、ラトビアに2人が重なった。エドガルス・カッタイ氏と片山醇之助氏（故人）である。カッタイ氏は現在当音楽協会の現地代表で正真正銘ラトビア人だが、日本ラトビア間に特異な橋を架けた2人の足取りを重視し、カッタイ氏の顔を中国近辺へ配した。

首都リガの中心部にある芸術家のたまり場「イシス」で、カッタイ氏は銘酒バルザムの杯を傾けてご機嫌にみえるが、その表情の奥に陰りがある。数奇な運命。ラトビア人ながら生まれも育ちも中国である。満州と言えばハルビン学院が有名だが、YMCA中学と北満学院を卒業し満州国政府の役人になった。戦後ソ連を経由して父母の故郷ラトビアへ帰り、日本文学の翻訳や日本語教育に携わった。日本語を話すラトビア人でカッタイ氏の名を知らない人はいない。

一方の片山氏は異色外交官である。ラトビアでロシア語を勉強中に古本を集め始め1万冊にもなった。読んでいては間に合わないから近くに住む少女に音読してもらった。のちにその女性が米国へ亡命して数十年後に突然片山邸へ電話し、片山氏は亡くなる数年前に単身訪米して再会した。ロンドンの古本屋で指揮者のロジェストベンスキーと珍本の奪い合いをしたこともある。退官後にロシア古書をリプリントする仕事を始め、20世紀初頭出版のロシア文学史ではミスプリントや註の間違いを古いロシア語で丹念に訂正し、そのできばえはロシア人学者をも驚嘆させた。（日口歴史を記録する会編「日露オーラルヒストリー」、彩流社、2940円）

※本書は筆者が20冊買い取り当協会に寄付ずみ。

琥珀

ラトビアへ戻ったオレグ・オルロフ氏から素晴らしい日本語による最新情報が届いたが、トリノ冬季五輪ルージュ競技で、ラトビア選手が銅メダルを獲得した喜びを素直に表現した一節にとても共感を覚えた▼オリンピックのメダルは国民に夢と希望を与えてくれる。だから、メディアは多くの特派員を派遣して大々的に報道する。私自身は本職がスポーツ記者で、オリンピック（夏季）は柔道を中心に数回直接取材しているが、冷静でなければならない記者が、オリンピックだけはその都度、完全に日本の応援団になってしまった。国内では日の丸や君が代にあまり関心を示さない若い記者も、日本選手が入賞した時は、心から拍手を贈り、表彰式では感涙を流す。こんなに愛国心の強い人間だったのかと、改めて感じる。トリノでは最後の最後まで日本選手にメダルがなく、それだけに荒川静香選手が金メダルを獲得した時は、日本中が歓喜の渦に巻き込まれた。普段はスキーやスケートに関心のない人たちも、オリンピックだけは夜を徹してテレビにかじり付きになっていた。当然、私も同様だった▼それでも、冷静に他国選手の活躍や成績も注目した。記者現場では、金メダルを獲得した国の記者にお祝いのエールを贈ることがある。我々日本の柔道担当記者はいつも喜びと満足感にひたったものだ。スケートで日本が惨敗した夜、韓国が男女ともワン・ツウ・フィニッシュを飾った。翌朝、韓国の友人に電話でお祝いを言った。ラトビアが、かなり早い段階で銅メダルを獲得したことも知っていた。オルロフ氏にメールでお祝いを言えばどんなに喜んでくれたかと、いささか後悔している▼オルロフ氏も触れていたが、私もラトビアのアイスホッケーチームに注目していた。期待通り、プロ選手で固めたアメリカと素晴らしい試合をした。親しい後輩記者は現地からこう伝えた。「アメリカは、旧ソ連から独立して以来の悲願であるメダルを目指すラトビアに、引き分けに持ち込まれた。超大国の猛攻は、日本の6分の1の面積の小さな国を崩しきれなかった。会場に詰め掛けた観衆に手を振るラトビア選手と対照的に、アメリカの選手はうなだれてリンクを後にした。ラトビアのベテランGKイベルは“小さい国にもチャンスがあることが分かった。この調子でメダルを目指す”と気を引き締めていた。男子アイスホッケーは伏兵から目を離せない」▼昨年の大阪国際女子マラソンでラトビア選手が優勝して興奮したが、最近は柔道も活発になってきた。毎年2月にヨーロッパ各国で大きな国際柔道大会が開かれるが、2人の選手が優勝した日本選手に食い下がっていた。機会があったら是非激励したいと思っている▼日本は外交的に四面楚歌の状況になりつつあると言っても過言ではない。心の通った真の国際親善に、芸術とスポーツを通した人と人との交流の果たす役割はますます増大する。間もなくラトビア大使館が開設されるが、いよいよ我が協会の本格的出番である。（徳）

北海道東川ラトビア交流協会の活動

北海道東川町ラトビア交流協会は、ラトビアが独立した翌1992年に創立されています。日本とラトビアの交流活動は、我々の大先輩ということになります。共に美しい自然に囲まれ、北国の豊かな心を持った人たち同士の共感が活動の根底にあるようです。

東川町は“写真の町”として余りにも有名ですが、過日の当協会総会・懇親会にも出席された松岡市郎町長は次のように話しています。

「東川町とラトビアの草の根交流は、平成4年秋に『新しい北の仲間バルト展』の一環として、『写真で見る現代史　ラトビアの夜明け』写真展が東川町文化ギャラリーで開催されたことがきっかけで始まりました。写真展では、“人間の鎖”という、かつてない抵抗運動でソ連邦から独立を果たしたラトビア、リトアニア、エストニアのバルト3国が紹介され、写真展のテープカットに、独立直後の当時の文化大臣、ライモンズ・パウエル氏が来町しております。ライモンズ大臣はご存知のように、名曲『百万本のバラ』の作曲で知られる国際的な音楽家・ピアニストで、東川町ではコンサートまで開いていただきました。首都リガには、小さな日本語夜間学校があったことから、ライモンズ氏のピアノに感動した町民有志が、絵本や教科書などを集めてリガに送ったのが『北海道東川ラトビア交流協会』発足のあらましです。以来、東川町の郷土芸能『羽衣太鼓ジュニア』がラトビアに招かれたのをはじめ、旭川チカップニアイズ民謡舞踊団の派遣、スクリデ３姉妹の招聘とコンサート開催、ラトビアの女子高校生3人の東川高校留学を実現、芸術家同士の相互交流など、芸術交流、音楽交流、人的交流を中心に非常に熱心に草の根交流を続けています」。

写真集
「ラトヴィア　愛される大地」

さまざまな形でラトビア文化を紹介している交流協会は昨年、グンティス・ウルマニス前大統領の要請で写真集「ラトヴィア　愛される大地」を翻訳・刊行しました。

ラトビアの歴史、芸術、暮らし、自然などが美しい写真とともに詳しく紹介され、ラトビアの魅力を知る格好の大判写真集です。おなじみのラトビア在住・黒澤歩さんが監修しています。会員の皆様に、是非座右におかれるよう、編集室からもお薦めします。

B4変形108ページ　価格3500円
送料340円

【お申し込み】
〒071−1426　上川郡東川町北町1−7−1　東川海洋センター内
北海道東川ラトビア交流協会
会長　西原義弘
電　話　　0166−82−4600
ファクス　0166−82−4607

《100万本のバラ》のオリジナル曲『マーラが与えた人生』

作詞　レオン・ブリディエス
作曲　ライモンズ・パウルス

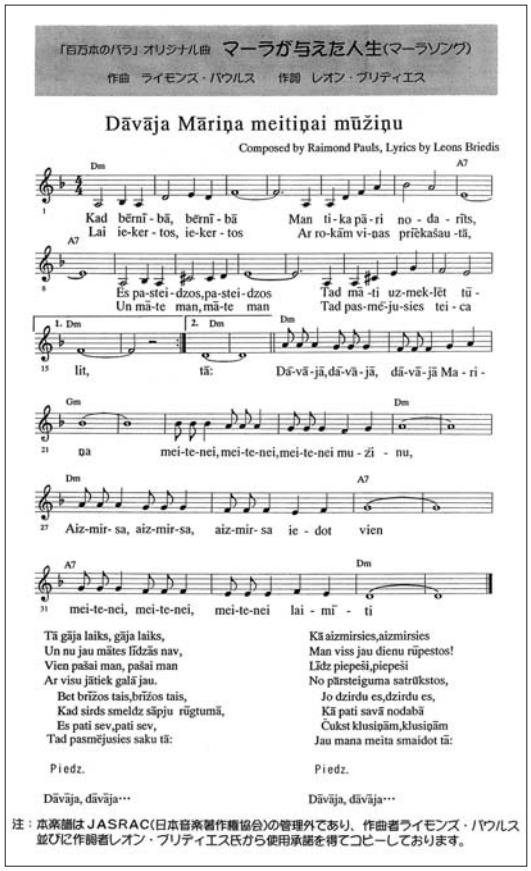
北海道東川ラトビア交流協会は、パウルスさんの東川コンサートが誕生のきっかけになりました。同協会の承諾を得て楽譜を掲載しました。懇親会で、全員でラトビア語で歌えればいいですね。

子どものころ泣かされると
母に寄り添って　なぐさめてもらった
そんなとき母は笑みを浮かべてささやいた
「マーラは娘に生を与えたけど　幸せはあげ忘れた」

時が経って　もう母はいない
今は一人で生きなくてはならない
母を思い出して寂しさに駆られると
同じことをつぶやく私がいる
「マーラは娘に生を与えたけど　幸せはあげ忘れた」

そんなことはすっかり忘れていたけど
ある日突然驚いた
今度は私の娘が　笑みを浮かべて口ずさんでいた
「マーラは娘に生を与えたけど　幸せはあげ忘れた」

（訳：黒沢　歩）



マーラは、ラトビアフォークロアでは、生命と母性を象徴する女神の名前です。また、とてもポピュラーなラトビア女性の名前でもあります。この歌はもともとラトビアの歌手アイヤ・ククレが1981年に歌って世に出ました。この頃独り身で一人娘を抱えていた彼女は、歌のヒット直後に自殺未遂しています。歌が歌手の人生と重なっていたのです。ライモンズ・パウルス氏は、初めから、彼女にこの歌をささげるつもりだったと言われています。

日本で流行した、貧しい絵描きの報われない愛の歌《百万本のバラ》は、ロシア語から翻訳されたもので、本来の意味と違います。ロシア語では愛の歌、ラトビア語では幸せの歌です。女の子は幸せが欲しい時にこの歌を歌います。

※北海道東川ラトビア交流協会は、「マーラが与えた人生」など11曲を収録したCDを制作販売しています（送料とも2000円）。演奏は国際的に活躍するスクリデ・シスターズ。

日本を代表するエリート、ダンディな紳士
熊谷直博氏の急死を悼む

1998年リガで撮影

年明け早々、熊谷直博会長死去の報はまさに青天の霹靂で信じられませんでした。通夜に伺って初めて実感させられましたが、その時、奥様は「主人はいつも、稲門グリーの皆様とラトビアへ行った時のことを、“本当に充実した楽しき旅行だった”といつも話していましたし、日本ラトビア音楽協会会長を誇りに感じていました」と話されました。

熊谷氏に名誉団長をお願いした稲門グリークラブのウィーン・ラトビア演奏旅行（1998年）が最初の出会いでした。私は旅行団の広報担当として終始熊谷さんに密着していましたが、本当にメンバーの一員になって楽しんで下さったし、引率力や、先方の要人を表敬訪問する時の風格・存在感は格別でした。筋金入りの信念の持ち主である半面、物腰の柔らかい社交術に長けた文字通り“日本を代表するエリートでダンディな紳士”でした。国を代表する大使はまさに天職でしたし、その後の迎賓館長という役目も、この人を置いては考えられという気がしていました。

旅行中、ライン川沿いのレストランで、その日たまたま誕生日を迎えられた熊谷氏に全員でハッピバースデーを歌った時の、豊かな表情・雰囲気が脳裏に焼き付いています。

とても筆まめで謙虚な方でした。死の直前に、「ホームページを更新したので、マスコミ人の目でご高覧・ご高評頂きたい」という内容の手紙を頂きました。“もう一度熊谷さんと一緒にラトビアへ行きたいという願いは叶わなくなりましたが、熊谷さんの当協会への熱い思いを大切にします”と霊前に誓いました。心から哀悼の誠を捧げます。合掌　（徳）

※ラトビアからも当協会を通じて多くの弔電が寄せられました。

大鵬薬品

チオビタ®・ドリンク

滋養強壮・虚弱体質・栄養補給

［用法・用量］成人（15歳以上）1日1回1瓶（100mL）を服用。タウリン1000mg

医薬部外品

チオビタ®ドリンク　チオビタ®ドリンクヘルシー

日本ラトビア音楽協会　会員名簿　（06年3月13日現在）　※ の方々が新しい入会者です

（氏　名）	（県　名）	（所属等）
安斎眞治	千葉	早稲田大学グリークラブOB会会長
池上隆一	東京	
石井洋一	東京	早混稲門会
石川晴彦	東京	㈳出版文化国際交流会副会長
石川了	東京	東北新社／クラシカ・ジャパン
石原祥弘	千葉	早稲田大学グリークラブOB会
石坂廬	神奈川	笹川平和財団
磯部光正	東京	早稲田大学グリークラブOB会
板垣忠直	福島	福島県芸術文化団体連合会副会長
伊東一郎	埼玉	早稲田大学文学部教授
稲山輝機	神奈川	毎日新聞／専務取締役
今澤哲朗	東京	東京稲門グリークラブ／幹事長
岩崎朋子	東京	㈲巣巣／代表
梅原由紀子	大阪	コーロ・ヌォーヴォ
頴原信二郎	東京	早稲田大学グリークラブOB会
遠藤守正	神奈川	遠藤税理士事務所
大澤寛之	埼玉	稲門グリークラブシニア会
岡村喬生	東京	オペラ歌手
岡安弘二 ※	東京	
岡安陽子 ※	東京	
小川翠	神奈川	邦楽演奏家
小野啓祐 ※	埼玉	新座ロータリークラブ
小山田安宏	東京	日本水路協会
オレグ・オルロフ	ラトビア	ラトビア大学
加藤登紀子	東京	歌手
加藤晴生	千葉	平成ビジネスアソシエイツ㈱
角谷仁	兵庫	かどたに内科医院／院長
金井万里子	埼玉	川越女子高校 音楽部
金岡隆	神奈川	早稲田大学商議員
神郡克彦	東京	長崎大学教授
菊地康則	東京	日本ガルータ協会代表
北畑雅敏	兵庫	神戸中央合唱団
工藤悠一郎	東京	東京稲門グリークラブ／指揮者
黒沢歩	ラトビア	ラトビア語翻訳家
黒澤幸男	東京	くらしき作陽大学音楽学部教授
ケイコ・マクナマラ	東京	歌手・ピアニスト
小礒明	東京	ラトビア共和国広報センター代表
耕納邦雄	東京	稲門グリークラブシニア会指揮者
小林晃	東京	日本大学教授
小林信一	東京	㈶合唱音楽振興会常務理事
小松原るな	東京	カンツォーネ歌手
斎藤哲	神奈川	日本経済新聞社社友
坂田知子	福島	スコラカントルム福島／マネージャー
坂場孝之	千葉	稲門グリークラブシニア会／幹事長
嵯峨山まり子	兵庫	魚住コーラス「わかくさ」指揮者
桜井珊子	東京	桜楓合唱団／会長
迫秀一郎	東京	サンルートプラザ東京総支配人
島田精一	東京	住宅金融公庫総裁
清水卓爾	東京	東京稲門グリークラブ
清水信行	神奈川	三井物産㈱／(元)常務取締役
清水實	東京	㈱アイラス／取締役
清水光子	東京	国立楽器
下田博郎	東京	慶応義塾ワグネル・ソサィエティ男声合唱団三田会 会長
ジャネット・スードニェツェ	東京	パレックス銀行／東京事務所長
白井克彦	神奈川	早稲田大学総長
菅谷信雄	東京	㈲マーキュリー物産
杉浦保友	千葉	一ツ橋大学教授
鈴木健三	神奈川	
鈴木秀洋	東京	
鈴木洋子	東京	
洲脇光一	兵庫	合唱指揮者
関口教和	東京	稲門グリークラブシニア会
滝澤文一	東京	リャザン・ロシア国立教育大学
武内正	東京	武内公認会計士事務所
舘野美久	東京	国際臨海開発研究センター
田中宏	山形	日本の歌を歌う会
田摩勇	千葉	NHKエンタープライズ
筑紫哲也	東京	ジャーナリスト
辻田行男	埼玉	辻田建築事務所
土屋昌也	東京	稲門グリークラブシニア会
戸叶孝一	東京	
戸田智子	東京	富士通
徳田晶子	東京	前 青山学院大学
徳田浩	東京	柔道新聞編集長
冨永侃	兵庫	早稲田大学商議員
長井秀行	神奈川	横浜稲門グリークラブ
中井弘明	東京	平成ビジネスアソシエイツ㈱常務執行役員
中澤亨	神奈川	横浜稲門グリークラブ
長澤護	東京	早稲田大学グリークラブOB会前会長
中嶋勝彦	東京	東京稲門グリークラブ
永田宏	東京	三井物産㈱／顧問
奈良原秀三	神奈川	早稲田大学グリークラブOB会
並木恒夫	東京	
西川新八郎	東京	スキル一級建築士事務所＆コンサルタンツ
西原義弘	北海道	北海道東川ラトビア交流協会会長
西脇久夫	東京	ボニージャックス
西山正俊	千葉	東京稲門グリークラブ
根本保子	東京	日本フィル協会合唱団
野瀬一郎	東京	早稲田大学グリークラブOB会
野村壽子	東京	㈱ネットワーク21
野村三郎	ウィーン	メロス音楽研究所代表
橋本恵子	千葉	前 サンルートプラザ東京
久元祐子	東京	ピアニスト
藤井明子	東京	
藤井威	東京	㈱みずほコーポレート銀行／顧問
福井忠雄	東京	福井自動車㈱／会長
福田美保	大阪	女性指揮者の会／副代表
藤原桂子	兵庫	女性指揮者の会／代表
風呂本武敏	兵庫	愛知学院大学教授
風呂本惇子	兵庫	城西国際大学教授
堀内啓吉	神奈川	早稲田大学グリークラブOB会
堀俊輔	埼玉	指揮者
堀川汎	東京	
前田幸子	兵庫	神戸中央合唱団
前田二生	東京	指揮者
前波享哉	福井	日本ステンレス㈱
松原千振	兵庫	東京混声合唱団／常任指揮者
松本数馬	東京	三井住友VISA
水谷鏡子	東京	㈲華のハーモニー
三巻義夫	神奈川	横浜稲門グリークラブ
三ツ松平	愛知	男声合唱団グランフォニック
宮崎勝治	神奈川	(元)朝日新聞ヨーロッパ総局長
宮尾益治	新潟	新潟放送参与
宮地和夫	神奈川	ローガンDX
村山喜一郎	埼玉	日本エストニア友好協会
森川智	東京	ヤマト科学㈱
八木昌子	東京	桜友女声合唱団／責任者
山本恭子	兵庫	コーロ・アロードラ
山本健二	千葉	声楽家　指揮者
山本茂男	東京	稲門グリークラブシニア会
山本徳行	福岡	北九州スウェーデン名誉領事
山元淑乃	ラトビア	ラトビア大学現代言語学部東洋学科講師
山根秀夫	兵庫	神戸新聞会長
山脇卓也	東京	日本無線㈱／合唱指揮者
吉田ラスマ	埼玉	(元)外交官（ラトビア共和国外務省）
レディー・マークス寿子	東京	作家　秀明大学教授

◇

有限会社　巣巣	東京
コーロ・ノーボ	大阪
東京六大学合唱連盟	東京
東西四大学合唱連盟	東京、大阪、神戸
神戸中央合唱団	兵庫
北海道東川ラトビア交流協会	北海道
川越女子高校音楽部	埼玉

◇

アウスマ　デルケーヴィッツア	ラトビア	ラトビア民族合唱祭名誉指揮者
エドガルス　カッタイ	ラトビア	ラトビア・日本協会会長
ダッチェ　アダムソン	ラトビア	ジンタルス指揮者
アイラ　ビルジーニヤ	ラトビア	指揮者

個人会員数　122名　内 ※ 3名
団体会員　7名　ラトビア国内会員　4名

【ご案内】当協会は2004年9月に発足し、演奏会、講演会、親睦会などを通じてラトビア共和国との交流を深め、同国の音楽情報・合唱楽譜の収集・公開などの活動に取り組んでいます。是非ご入会ください。お問い合わせは1面題字右掲載の事務局へ。年会費は個人5000円です。

ホームページ本格始動

当協会のホームページが本格的に始動しました。TOPICSは頻繁に更新して新しい情報を伝えます。BBSを会員皆様の交流の場としても積極的にご活用ください。近く、ラトビアの音楽も聴けるよう準備を進めています。感想などもどんどん書き込んでください。

http://www.jlv-musica.com/

“ラトビア”でも検索できます。是非“お気に入り”に加えておいてください。

早大グリー、日フィル定演に出演

早大グリークラブが4月13・14日にサントリーホール大ホールで行われる日フィル第579回定期演奏会（ベルリオーズ「幻想交響曲」「レリオ［生の回帰＝日本語上演］」に出演します。指揮は長年早大グリーを指導する小林研一郎。独唱は五郎部俊明（テノール）と大島幾雄（バリトン）で辰巳琢郎のナレーションが入ります。合唱は男声を早大グリー、女声を東京芸大声楽科有志・東京女子大・日本女子大他が担当。

入場料：S 7200円、A 6200円、B 5200円、C 4200円

情報断片

○…Latvijaに、大鵬薬品様のご好意で大きな広告が入りました。小林幸雄会長をはじめご担当の皆様に心からお礼申し上げます。発行回数を増やすことが可能になり、しっかりした会報紙作りに努力します。皆様からの情報をどんどんお寄せくださるよう期待しています。私の本職である執筆・編集は深夜の作業が多いのですが、「チオビタ・ドリンク」を常備して元気を付けています。

○…広報のもう一つの柱、ホームページも本格的に始動しました。TOPICSは頻繁に更新します。ラトビア大使館創設に伴う、クラヴィーテイス大統領、パブリクス外相の来日情報など、最新情報も順次掲載しています。是非定期的にご覧ください。会員各位のプライベートな話題などもどんどん書き込んで相互交流を深めてください。

○…第1回指揮者交流プロジェクトは大成功でした。厳寒の中の熱い指導で実りある交流を果たされた松原さん、本当にご苦労様でした。

○…より多くの方々と連帯の輪を強めたいと願っています。取りあえずご友人・知人のお一人を新会員にご紹介くだされば幸いです。（徳）